電子版市民プレス　第77号

タブロイド地域紙「市民プレス」第77号（2017/7/5発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

目次

-PAGE 2 **武蔵野台地の小さな街の記憶　その五**
-PAGE 7 半右衛門日記に記されているのは・・・ -PAGE 10 お春さんの家出事件
-PAGE 12 半右衛門の日常は・・・ -PAGE 13 星野家は屋敷全体の土地を手放す
-PAGE 15 「郷土志木」、「ふるさと史話」、「志木市郷土誌」の上梓（じょうし） -PAGE 17 志木市の歴史
-PAGE 18 「田子山富士」の誕生 -PAGE 20 「お胎内」を発見した人 -PAGE 23 築造の話題
-PAGE 24 「朝日屋」の創業 -PAGE 27 敷島神社の創建 -PAGE 28 東武東上線の開通
-PAGE 32 開業の当日より一週間は・・・ 志木市に電灯がつく
-PAGE 35 電化された大正時代初期の絵葉書 市場坂上から現・上町方向を望む

武蔵野台地の小さな街の記憶

引又宿から志木町へ、そしてベットタウンの志木市へ

「伊豆殿堀」が市内を通過して商業は繁栄したが・・・

五・一 「引又宿」の「会所」

弘化四年(1847)に、二十二才で星野家に迎えられた養嗣子は半平(星野家二代目)と名乗り、引又宿の名主役を継いだ。江戸時代には自治集会所があって、そのころ、星野家の屋敷は「会所」と呼ばれ、近隣の人々の良きコミュニケーション・センターとして機能していた。

半平は、地域の紛争を調停することに優れた手腕を発揮し、名主を辞めた後も地区内の多くのトラブルを仲裁し、解決した。知識人の半平が、まちの情報通として残したのは、

五・二　「星野半右衛門日記」・・・

幕末のころ、彼は品川の御台場まで船に乗って視察に出掛け、現・板橋区、高島平で行われた役人の大砲の演習を見学した。明治維新の時代となって、ペリーの率いる黒船の来航、川越藩から浦賀への出動、各大名による防備固め、黒船の浦賀沖からの退去などについて多くの見聞を得て、日記に詳しく記録した。半平は襲名して半右衛門と称したので、「星野半右衛門日記」と呼ばれる。

この日記には身の回りに起こった日常の生活なども詳細に記されているので、当時を偲ぶ貴重な資料として、志木市の「指定文化財」に指定された。

初代の半平さんが残した「引又宿古絵図」（本紙の前号を参照）と二代目の半平さんの「星野半右衛門日記」は、志木市の歴史を知る上で極めて重要な資料だが、これらが世に出たのは、当時、志木市文化財保護審議会委員長をされていた神山健吉氏の調査によるものである。

そのときの状況を神山さんは語っている。

「星野半右衛門さんの曾孫、モトさんが住んでいた逗子に伺ったのは、昭和四十八年(1973) 六月のころ、初対面だったが、歴史的な史料を蒐集するために志木から来ました

と説明すると、快く、いろいろなものを出してこられた。ビニール袋の中に入れてあり、のりが剥がれていたが、拝見すると、「星野半右衛門日記」や、「引又宿古絵図」など、大変貴重なものだが、それらを丸まった形のままで貸して下さった。ところが、その年八月頃、モトさんは亡くなり、その上、息子さんの和正さんは四十代半ば、昭和五十年に亡くなった。今は和正氏の奥さん、律子さんとその息子さん、娘さんがおられ、奥さんは「茜」という染物のお店を開いておられる」。

五・三　「志木宿」の誕生　親村と子村は対立していた・・・

それまで、自然な形で発生した「村」の区域は、明治二十一～三年、「町村制」の施行によって、数ヶ村ごとに纏められた。全国的な規模で、大きな行政単位に、というお上からの指令とはいえ、他村に吸収される形を嫌うのはいつの時代でも同じだ。

例えば、合併以前の村々の名前を一字ずつ取って新しい村名とすることも珍しくなかった。旧鶴瀬村（現・富士見市）は鶴馬と勝頼の「鶴と瀬」を合わせ、旧水谷村（同）は水子と針ヶ谷の「水と谷」を取って名付けた、などは典型的なものである。

明治中期の合併に先立って、明治七年、舘村と引又町との合併は行われた。その契機となったのは、明治五年に実施された、地主の所有権を公的に証明する県発行の「地券」（権

利証ともいうべきもの）の作成だった。旧来の検地帳などの土地帳簿と照合して行われたが、従来の検地帳では、舘村と引又町の土地は同じ帳簿に記載されていたところから、舘村は一体化すべきだとの意見を県当局に提出した。一方、引又町では地券の一体化に対し「分村願」を提出して鋭く対立した。

明治六年、地券については、引又町は舘村名義で取り扱われることが県の裁定で決まり、翌七年、両町村は合併して「志木宿」が誕生したのである。しかし、農村だった親村の「舘村」に対して、子村ではあるが、河岸場・市場・宿場をもち、繁盛する商いの町場だった「引又町」の住人たちの鼻息は荒かったので、肌合いが異なる住民の対立は先鋭化していった。

両者の対立解消を目論んだ県の役人は、妥協案として、昔この近くにあった「志木郷」という郷の名称から「志木」を借用することを提案して決着した。

五・三　「会所」はその後・・・

紛争の調停に手腕を発揮した星野半右衛門は、明治六年に戸長（のちの町長に当る）を務めたが、明治三十年代になると、裏に引っ込んで隠居所に入った。代わって、明治四十年代の始め頃、息子の照二が町長を勤め、町政に大きな足跡を残した。しかし、政治的な妥協を好まず、孤立して、財政的にも「会所」の土地の維持が困難になる。

同四十三年、土地を原林吉に売却し、裏地に建物などの一部を裏地に移転したが、その後、間もなく亡くなった。跡地には、一時的に「警察署」が置かれたが、原林吉は、「朝日屋」（薬問屋）の建物の建設に取り掛かる。明治四十五年に完工して、現地の斜め向い側で営業していた店舗を、新家屋に移転した。

この建物は、二代目原林三、三代目原昭二に継承されて現在に至っている。創業は明治二十年代に営業が始まったので、創業百二十年、現在の建物のうち、主屋は百余年を経て維持された。その後増築された別棟などを含む七件は、平成十五年、「録文化財」として官報に公示され、「登録証」が交付された（本紙の「かわら版」＜2003＞）。

五・四　「会所」はその後・・・

紛争の調停に手腕を発揮した星野半右衛門は、明治六年に戸長（のちの町長に当る）を務めたが、明治三十年代になると、裏に引っ込んで隠居所に入る。代わって、息子の照二が町長を勤め、町政に大きな足跡を残した。しかし、政治的な妥協を好まず、孤立して、財政的にも「会所」の土地の維持が困難になる。

土地を原林吉に売却し、建物などの一部を裏に移転した。彼は、その後、間もなく亡くなり、跡地には、「警察署」が置かれた。地主となった原林吉は、「朝日屋」（薬問屋）の建

物の建設に取り掛かり、明治四十五年に完工した。

現地の斜め向い側で営業していた店舗は、新家屋に移転され、二代、林三、三代、昭二に継承されて現在に至っている。明治二十年代に営業が始まったので、創業して百二十年となり、現在の主屋は百余年を経て維持されてきた。

その後、林三によって増築された別棟などを含む七件は、平成十五年、「登録文化財」として官報に公示され、文化庁から「登録証」が交付された（本紙の「かわら版」＜2007＞）。時代は戻って、「会所」だった頃の、

五・五　半右衛門日記に記されているのは・・・

彼が青年期・壮年期を送った嘉永から安政にかけて、身の回りで起こった出来事である。今に残されたのは、嘉永五年（1852）～安政二年（1855）、同四年（1857）、及び明治八年、同十一年～十三年の部分についてである。

彼の生い立ちは、文政八年（1825）、白子宿（現・和光市）の名家富沢家の次男に生まれ、星野家に養子に入り、二十二才で名主役を務めことになったのである。引又宿の政治に重きをなす一方で、農業、地主、質屋経営、寺子屋経営等をも行い、引又の経済の一翼を担う人物だった。日記には、彼の眼に映った事柄が克明に記されているので、志木地域で幕末の様子を知る貴重な史料となった。

「半右衛門日記」は、神山健吉氏他によって、詳細な分析と丁寧な解説が付され、志木市史の別編として刊行された。

志木市に移り住み、その歴史に触れて「半右衛門日記」に興味をもった島田公男氏（「志木のまち案内人の会」）は、新しい視点をもって読み解き、幕末に生きた人々の実像を探索している（本紙48号）。その中の幾つかを紹介したい。

女性の江戸行き小旅行

島田氏は、半右衛門日記の中の女性に注目し、「江戸時代は封建時代で、女性は虐げられていたと思われ勝ちだが、決してそんなことはなく、むしろ現代よりも、自由闊達に人生を楽しんでいた時代のように思う」、と記している。

半右衛門の養母のゑと妻ちか（実家の望月氏は豪商）は、よく泊りがけで出掛け、実家に数日から十日も実家に帰ることがあり、江戸にさえもよく出掛けたようだ。以下、養母と妻

「星野半右衛門日記」

www.city.shiki.lg.jp

の江戸行について、

○ 嘉永六年（1853）四月十五日、おちか并びに栄之進（のちに照二と名前を変える）両人義今夜早船にて江戸行、尤も新河岸望月氏母様矢張り早船にて江戸へ御出の趣。○ 同月二十一日、おちか并びに栄之進両人義今夜四つ半頃帰り。但し新河岸早舟に乗来り、引又河岸迄花川戸中村屋老母わざわざ送り呉れ候由。○ 同年十二月二十二日、今朝母義早舟に乗り江戸より帰る。○ 嘉永七年十月二十三日、母義早船にて江戸へ行。○同月二十九日、朝、母義早船にて江戸より帰宅いたし。

当時の江戸、花川戸は・・・

現・台東区花川戸一丁目近辺に当り、東武伊勢崎線浅草駅と松屋デパートから浅草寺と隅田川の中間の辺りとなる。一行は、浅草花川戸の取引先宅にお世話になったか、その近辺の旅籠に宿泊したのではないか、と島田氏は推測している。

浅草は当時も大変な盛り場で、花川戸から目と鼻の先の猿若町（現・浅草六丁目）は芝居小屋が軒を連ねており、さながら江戸のブロードウエイだった。祖母、母、孫の三人連れで芝居見物を楽しみ、また観音様を始め、お寺が多い町なので、神社仏閣への参詣もしたのではなかろうか。

お春さんの家出事件は・・・

○ 嘉永六年（1853）十二月十一日、夜五つ半時頃、三上権兵衛殿娘お春どの義、下女さきを連れふと家出いたし候に付、我等并びに三上一門の若手作次郎殿外に三上酒蔵杜氏右三人にて同刻より白子通り道々相尋ねる。

三上権兵衛は、商売や酒造業などを手がけている豪商兼実業家、半右衛門とは村役人仲間で、日頃から親しく付き合う友人だった。お春さんは、引又から早舟に乗ると行先がばれてしまうので、朝霞或いは白子あたりまで歩いていき、途中で早舟に乗ったものと思われた。その行動は全てお見通しで、半右衛門らはお春さんらの足取りを道々聞き取りをしながら、早舟を先回りし、歩いて千住橋戸町井上八百八殿方千住に向かう。刻限明け七つ過ぎ到着、同人方に罷り居り早舟を相待ち候処翌日に移る。

「早舟＝又は早船」にてと書かれているが、気楽に江戸との行き来が出来るのはこの早舟のお陰では、と考えられる。新河岸川の舟運が乗客を運ぶようになったのは天保年間からと言われ、この時期、早舟は夜に引又を出て、翌朝、江戸に着いており、新河岸（現・川越市）を出発して途中の引又等で客を乗降させながら川を下っていった。江戸から帰る便も徹夜で運行され、朝には引又に着いていた。また、深夜、引又に到着する便もあったようだ。

○ 翌十二日、明七つ半より八百八殿方にて待ち居り候処、朝四つ時新河岸早船にてお春どの下女共両人乗来たり候間取押え、食事等いたし、杜氏は宿元へ知らす為として引又へ遣し。お春殿・下女・我ら・作次郎都合四人八百八殿方より屋根舟に乗り日本橋迄行、此の舟賃金壱分外に酒代弐百文遣し（高額で、半右衛門は、奮発したようだ）。但し江戸橋より上り室町伊勢屋四郎兵衛殿（友人か取引先か。住所は室町三丁目。日本橋一番の中心街）へ立寄り、それより馬喰町弐丁目武蔵屋仁兵衛と申す旅籠屋へ行き泊り。

家出したお春さんは、この事件の一年半後に、半右衛門の仲人で結婚したのであるが、ほぼ二年後には、また星野家のお世話になる。

お春さんの不義事件・・・

○ 安政四年（1857）一月十三日、三上伊太郎女房はる義、不儀の始末之有り、今夜早舟にて江戸表へ遣し、但し我ら母同道にて行。御老中堀田様御屋敷へ奉公に上候。

三上伊太郎の女房お春が不義事件を起こして所払いになり、お春を江戸の奉公先に連れて行くのが半右衛門の役目だった。老中堀田様とは、駐日米国総領事のハリスに修好通商条約を突き付けられて四苦八苦したあの堀田正睦で、彼が条約の勅許を得る為に上洛する丁度一年前のことだった。

それにしても、人妻の不義に対するお仕置きが上級武家屋敷への奉公というのは、現代人が成る程と思う良い対応のようでもある。

半右衛門の日常は・・・

年中行事の遂行、公務、役所からの呼出への対応や出張してくる役人の応対、訴訟の調停、次々と持ち込まれる相談事の対応、仲人役の遂行と結婚式、稲作と畑作、商売、寺子屋の師匠、神事と仏事、葬式、頻繁に訪ねてくる親類・知人・商売相手との応対、商売の代金取立て旅行、等等に忙殺されていたように見える。そして何か事件があった時、例えばペリーが二回目に浦賀に来たしばらく後、江戸の勘定方役人の用人から衣装を借りて侍に変装し、役人のお供としてお台場の砲台工事を見学に行ったりしている。また、殆ど毎日と言って良いくらいに知人友人と酒を飲み交わしていて、半右衛門は、現代人と比べても心豊かに充実した人生を送っていたと言えるのでは、と島田氏は述べ、半右衛門日記から知り得る幕末の引又は、とても良い時代だったように思われる、と結んでいる。

五・六　その後星野家では・・・

半右衛門の長男、栄之進が照二と名を変え、すでに記したように（五・四を参照）、明治三十年代から志木町長を務めた。同三十四年、それまでの「寺子屋」から脱却するため、小学校

校舎の建設を県に申請して建築を開始したが、その費用の支出を廻って、町会議員と対立、退職に追い込まれた。その後助役として町政に復帰したが、議会との対立は解かれず、辞任を余儀なくされる。本紙五十一号（2011）に、『国民新聞』（徳富蘇峰が発刊した日刊紙）、明治四十年十二月、冒頭の記事、『志木町の紛糾』と題する部分が紹介されている。

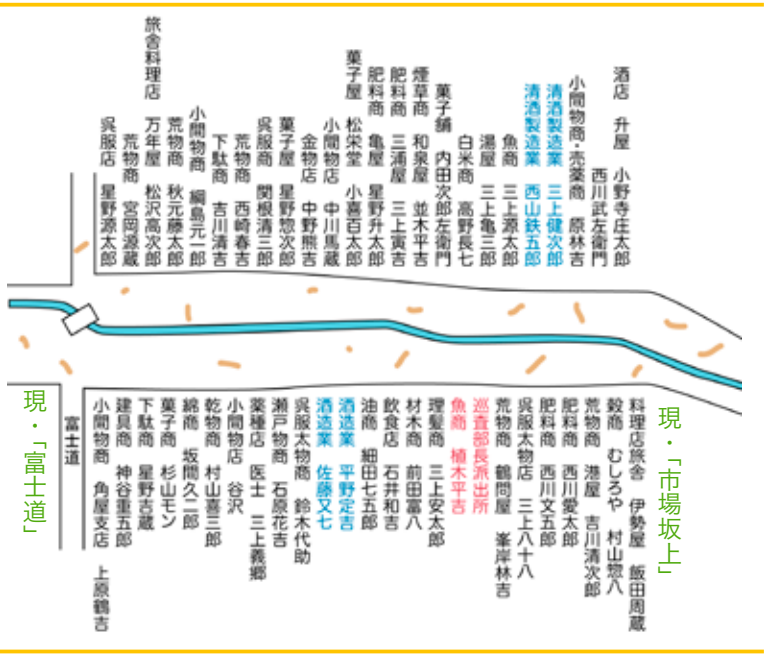
照二はついに自身の居宅を引払って政治から離れ、自宅の裏手に転居した。明治三十五年の「埼玉県商業便覧」によると、巡査部長、派出所、その隣りに魚屋さんの植木平吉（富士通の角地に移転された「魚平」さん）と記されていて、先祖代々続いた「会所」の建物は無い（次頁下に示した図表＝中央を野火止用水が流れる、現・本町二、三丁目の「市場通り」、バス停の「富士道」と「市場坂上」間を参照）。

屋敷全体の土地を手放すことになって、明治三十九年（1906）、原林吉と売買の契約が行われる（同地に現在の「朝日屋原薬局」が建設されたことはすでに述べた＝「五・四」を参照）。その間の明治四十三年初頭に照二は死去したので、同居していた娘、その婿、子供達は、志木から転出したようだ。しかし、それが何時だったか、などは不明である。なお、「かつての志木を語る」と題する座談会（本紙三十六号＜2007＞）に掲載されたで、神山健吉氏は次のように語っている。

「照二の住んでいた居宅は、私の伯母に当る神山イトが買取り、現地から数百米裏に移転した。近隣からは、「会所」の風情が残されていたので、頼りにされたらしい。なお、残された照二の娘、わしさんは、山口県の方から婿入りした礼蔵さんとの間に子供が二人いて四人家族だった。娘はモトさん、弟の息子は、経師屋さんとして宮内庁にも勤務していたことがあるという。しかし、大正八、九年に早死したので、急遽姉のモトさんは、群馬県の方から修蔵さんという婿を貰って瀬戸物屋を開いた」。

前頁に記したように、神山氏が葉山に赴いて多くの貴重な資料を入手されたが、これらを渡した方が、このモトさん（星野半右衛門の曾孫、照二の孫に当る）である。

さて、志木市の歴史を語るためには、そ



の基礎として、又、基本的な事項を網羅した文献として、次の三つを挙げるべきであろう。

「郷土志木」、「しき ふるさと史話」、「志木市郷土誌」が上梓(じょうし)された・・・

昭和四十七年(1972)、「志木市郷土史研究会」の創立総会で、井下田四郎は会長として推挙された。会長の井下田は、自ら、「新河岸川舟運」を寄稿して、論文誌の「郷土志木」が創刊された。

間も無く、井下田は病いに倒れたが、研究会の運営は、関係者に委ねられ、特に、本会発起人代表の神山秀三郎は、その従弟に当たる神山健吉を擁して、事業の確立に努めた。祖先が築いた歴史を後世に残したいという熱意はさらに強化され、現在、会長を務めるのは、文化財保護委員長の井上国夫で、昨、平成二十八年、60頁の「郷土志木」第45号を発刊している。

昭和五十三年(1978)、教育委員会の編集により、「志木市郷土誌」が発行された。さらに、平成六年(1994)、同委員会は、「しき ふるさと史話」を発売した。同書は、平成三年九月から、同六年まで、東京新聞に連載されて、好評を得た「新河岸河畔いにしえ話」(執筆したのは、文化財保護委員長の神山健吉、同副委員長井上国夫、同委員の高橋長次)を纏めたものである。

以下、これらの書籍に準拠して、志木の酒造り、田子山富士と敷島神社の創建、東上線の開通などの事項を記述することにしたい。

五・七　酒造業が盛んだった引又 戦争中でも三軒が営業していた

現在の志木市の中核部分を占める本町地区(明治七年以前の引又)では、酒造に好適な硬水が豊富に得られ、素材としての米を精白する水車が宝暦十年(1760)以後、何軒も地元で開業したこと、製品の酒を消費地の江戸に出荷するのに便利な河岸場を擁していたことなどのため、早い時期から酒造が行われていた。確かな資料によって裏付けされるのは、元禄十四年(1701)である。その頃、引又の二軒のほか、親村に当る舘村にも二軒あったが、何れも村役人を務める良き家柄による酒作りだった。

ところが、舘村からは酒造業者が姿を消し、条件に恵まれた引又に集中していった。その数は天明五年(1785)に四軒、天保十四年(1843)には六軒と増えていった。

もっとも、営業としては順調ではなかったようで、経営者が代々代わっている。しかし、酒造株の譲渡はそれほど簡単ではなく、譲渡が正式に承認されるまでに時間を要し、その間、他人名義で醸造していた様子も窺える。

なかには、所沢在住の酒造業者が営業不振の引又の同業者の元に転居してきて操業を始めるといったケースも見られた。

酒造石高は天保十四年当時、六軒の合計が千五百十八石の鑑札を得ていたが、慶応二年

(1866) の米価高騰に当たり、関八州の酒造業者が一律四分の三に生産制限を課せられた際、引又地区も例外ではあり得ず、三百九十二石にまで減らされている。

その後、明治初年には一軒減って五軒となり、明治二十年代には西山鉄五郎、三上健次郎、佐藤又七、平野定吉の四軒、明治末期には佐藤が廃業したが、残りの三軒は酒造業者の統廃合が行われた太平洋戦争ころまで営業を続けた。

なお、明治中期ころに操業していた四軒の酒の銘柄は、西山家が「花姿」(後に「国柱」)、三上家は「狸々舞」(後に「伊佐川」)、佐藤家は「正吉」、平野家は「喜代泉」だった。なお、西山鉄五郎は明治三十年から十八年、埼玉県酒造組合の組合長を務めている。

五・八　「田子山富士」の誕生

明治五年 (1872)、「志木のお富士さん」で知られるミニチュアの富士山が完工した。

築造を発起したのは、上町 (現・本町二丁目) で醤油醸造を業とする高須庄吉、彼は富士信仰に篤い人物だった。或る夜の夢がきっかけとなり、近くの小高い塚、「田子山」に登った。そのとき、横倒しになっていた板碑を発見した。

それには、暦応三年 (1340) と刻まれ、富嶽に縁の深い碑だった。この碑の主は「十瀧房承海」と記されていた。廻国の僧 (又は、館村の僧か?) で、この地で病魔に襲われたので、富士山入定 (修行によって悟りを開く) を決意した。これに先立って、「逆修碑」(生前、仏事の後に冥福を祈る碑) を建立した、とされる。

この「田子山塚」は、文化十一年の絵図 (「引又宿、

＝志木市の歴史＝

- 1872　明治五年六月　田子山に、ミニ富士が築かれる
- 1874　明治七年　引又と館が合併して志木宿となる

同年七月　志木・宗岡に小学校が開設される

- 1890　明治二十三年　志木宿が志木町に改められる
- 1897　明治三十年十二月一日　第八十五国立銀行志木支店が開設される
- 1912　明治四十五年　浦和商業銀行志木支店が開設し、瀟洒な建物が目を引く
- 1914　大正三年五月一日　東上線が開通し、志木駅が設けられる　志木に初めて電燈がつく
- 1916　大正五年六月二十八日　浦和志木間に乗合自動車が開通する
- 1937　昭和十二年　第八十五銀行が浦和商業銀行を買収する
- 1939　昭和十四年四月七日　志木町立商業学校が設置される
- 1941　昭和十六年四月一日　小学校が国民学校となる　志木・宗岡・水谷・内間木の一町三村が合併し、志紀町となる

十二月　慶應義塾獣医畜産専門学校 (現慶應志木高校) が川崎市から移設される

- 昭和二十三年五月三日　志紀町が分割され、合併前の一町三村に戻る
- 昭和二十四年三月三十一日　町立志木商業学校が廃止され、ここに志木中学校が移る　日本レダリーKKが柏町に創業

市場の野火止用水が暗渠となり、道路が拡幅される　志木駅が改築され橋上駅舎となる　市制が施行され志木市となる

志木市役所新庁舎が落成する　志木駅北口・ショッピングタウン (ダイエー) 完成

	元号	西暦
1800	文明	1801
	文化	1804
	文政	1818
	天保	1831
1850	弘化	1845
	嘉永	1848
	安政	1855
	万延	1860
	文久	1861
	元治	1864
	慶応	1865
	明治	1868
1900		
	大正	1912
	昭和	1926
1950		
	平成	1989
2000		

前号を参照）の東南に描かれ、「古墳」のように見える。又、少し離れて、その南に、もう一つ、別の「田子山塚」が描かれている。当時は二つの「田子山塚」が所在し、絵図では、西方の塚の上に神社が祀られ、鳥居も描かれている。後に、結社、「御嶽講」ができて祀られた、現在の「御嶽神社」と考えられる。さて、

「田子山富士」の築造は大規模な工事だった・・・

発起人の高須庄吉は同志を集め、友人にも呼び掛けて獅子奮迅の活動を開始した。醸造の神を祀る「松尾神社」の信者や、引又河岸の舟運関係者にも協力を求め、塚の上に土盛りをする工事に着手する。庄吉の敬神に基づく義挙が伝わると、各地から馳せ参じ、寄進に応募するものも日毎に増えていった。

歌舞伎役者の尾上菊五郎、市川左團次、岩井半四郎らを始め、先達（信者の先輩）、職人、商人、農民などから寄進や労力の奉仕が得られた。県内は勿論、東京、静岡、神奈川、山梨、茨城、千葉、群馬、長野、岩手方面と広範囲にわたる。

工事は土盛りに続いて岩石を配置、植樹して、高さ、約九米、円周は百二十五米余、斜度三十九度の丸味をもった富士塚が完成した。登山道がつくられ、山頂には木花開耶姫を祀った浅間社が造営され、麓には、彼が発見した「逆修碑」を祀り、「浅間下社」を造営した。

『調査報告書』は・・・

昭和六十三年から平成七年に掛けて実施された調査によって作成され、ようやく、平成八年に刊行された（上下二冊）。上巻には、本編と関係資料を、又下巻には、石造の全容が詳細に掲載されている。

調査は、市文化財保護委員の神山健吉ほかによって行われ、報告書を執筆、又、文化財保護委員の高橋長次と、同市職員の今野美香が古文書の解読に当り、「報告書」は、同市教育委員会の手で最終的に纏められた。

特記すべきは、高橋長次の独自の調査資料である。第二次大戦後、彼は、現地の近くに居住していて、「田子山富士」の石像などが次々と持ち去られ、荒廃してゆく状況を目の当りにした。「田子山富士」の詳細な記録を将来に残すべく、単独で行った調査は、昭和五十年頃からほぼ十年に及んだ。特に、石造物の詳細な記録（下巻）は、本調査の類いなき基盤として役立った。

五・九　「お胎内」を発見した人・・・

富士山を修行の場所として組織された「富士講」の一つ、宗岡の「丸藤講」の講員を務めた星野勘蔵は、富士の登山、登拝、八十余回もの経験をもち、明治二十五年、富士山の北口

で新胎内を発見した。「吉田お胎内」と呼ばれている。今から千年以上前の承平七年（937）、噴火の際に流出した溶岩流の東端に形成されたもので、その形は女性の胎内に例えられ、胎内信仰に繋がっていった。「吉田お胎内」は、修行者たちの祈りの対象となり、富士講の講者・御師たちによって守られてきた。年に一度、吉田胎内祭が開かれるが、通常は、内部は非公開。

富士山は、古くは、昭和三年、天然記念物として指定されたが、平成二十五年（2013）には、「富士山＝信仰の対象と藝術の源泉」として世界文化遺産に登録された。このとき、「吉田胎内樹型」（かつての噴火のさい、幾つもの樹木が重なった複雑な樹型）として、その一部となる。星野勘蔵は講の先達として、「日行星山（にちぎょうせいざん）」と呼ばれ、その石碑が上宗岡四丁目に所在する。

田子山富士の北麓にも、安産信仰の「御胎内」がつくられたが、後に、入口周辺部が崩落したため閉鎖を余儀なくされた。

平成十八年(2006)三月、埼玉県の「有形民俗文化財」に指定されたが、「田子山富士」は、近年、老朽化に伴って登山道などが崩れ、立ち入り禁止になっていた。又、平成二十三年の東日本大震災では、多数の石碑などが倒壊し

右は「お胎内」の内部

左は内部から開口を望む

http://www.yamanashi-kankou.jp/

て追い打ちを掛けた。

五・十　保存会の努力によって修復工事が始まる・・・

「田子山富士保存会」が結成され、草刈りなどの手入れが行われたが、山頂までの登山道は使えないままだった。そこで、地元の保存会は修復工事を発起し、その費用の募金を呼び掛けた。市民ほかから千七百万円以上が寄せられ、県や市の補助金を加え、本格的な修復に着手、平成二十七年度からの工事で登山道が修復され、翌年の七月から、塚の頂上まで登ることができるようになった。工事は、ほぼ二年間で完了し、「お胎内」も修復された。

平成二十九年（2017）、「吉田お胎内」が所在する山梨県富士吉田市と、文化・観光交流協定を締結し、保存会（会長：清水良介）は、大安の日を、「開山日」と定め、志木市商工会の協力を得て、登山者の援護を行っている。また、提携した富士吉田市と志木市は、友好都市として、合同のイベントも行っている。

五・十一　築造に関わる話題・・・

「お胎内入口」の上部に吉田胎内神が祀られている

写真は『富士の国やまなし観光ネット』より引用

富士山の築造に使った赤土の採取については、埋蔵文化財の活動で、敷島神社隣地にその採取の跡が発見されたが、その上に築いた「黒ぼく」と呼ばれる溶岩を、富士山から搬送した経緯は不明である。遥か遠方の富士山で採取した後、人力車で搬送した、とする説もあるが、志木の大店は、かつて、温泉の湯を、東京湾を経て、新河岸川の舟運で取り寄せた、という歴史があるので、如何に重い岩石であろうと、舟運も使用されたに違いない、とする説もあって、明確ではない。さらに遡って、「田子山」という地名は、文化十二年(1815)、斎藤鶴磯が著した「武蔵野話」にも記されている。「引又村のうちに田子山という小地名あり。ここに石碑あり、文化のはじめ此地の寮主此田子山塚より穿出せしを直に塚の上にたて置しなり。碑面の文何の事なるや解しがたし。土人のいえるは十瀧房承海といへる僧富士山へ入定せん事をおもひ立、逆修を建置て直に富士へ入定せしといひつたふ。按ずるに富士の縁あるゆへに此所を田子山と号しか」とあって、当時既に「田子山」と呼ばれていたことが知られ、この頃板碑が一度発見され、塚の上に建てられた経緯などが認められている。

既述したように、田子山富士の築造は、神託によって富士に因む板碑が発見されたことから、高須庄吉らが素願を起こしたとされているが、既に彼らは「武蔵野話」を読み、そのことを熟知していたはずであるのに、枕神の託宣による板碑の発見という奇瑞現象で築造の素願を

起こしたというのは、演出によるものでは、と見る向きもある。

高須庄吉は、大正四年、八十七歳の長寿を全うして逝去した。

諡は、「大教正贈田子山能勲夫命」、神霊となって、駿河の富士へと向かった。

田子山富士の完成と相前後して、庄吉は富士講を結成し、地域富士信仰の基をなして多くの信仰を集めたが、大正四年十月十五日、八十七歳の長寿を全うして逝去した。

「大教正贈田子山能勲夫命」の諡を以て神霊となり、駿河の富士へと向かったわけだが、その庄吉の入定を見守るかのように「雲霧を分けて旭の大沢を、富士より不二へ渡る朝鳥」と誰かが詠んだ富士塚の歌碑が、はるかの霊峰富士を拝している。

五・十二　「朝日屋」の創業・・・

明治二十年（1887）、現・朝霞市浜崎から志木市本町に移り住み、新河岸川の舟運を活用して、いち早く海外の新薬を輸入して販売した。原林吉の店は、通称「ハラリン」と呼ばれ、周辺の町や村にも広く知られ、親しまれていた。

諸外国から化学薬品、工業薬品を輸入して販売した。特に、先進国のドイツから輸入された化学染料、その他は、浅草を経て新河岸川の舟で運ばれてきた。その頃の外国船は、東京

湾に注ぐ隅田川を遡って、現・吾妻橋辺りで積荷を下ろす。

直ちにそこで取引きされたので、原林吉は、仕入れのために頻繁に浅草に出掛けた。また、これを志木の店で販売、集金したお金は、金融の中心だった日本橋まで持参して取引した。早船もあったが、大金を身に付けていると、狙われて危険なので、単身、徒歩で東京に向かった。

原林吉の、先見の明に拠る商品の仕入れと販売は、輸入の板ガラス、大谷石、国営工場で醸造されたビール、カーバイト（アセチレン灯に）などの工業薬品、始めて国産化された、近代化を象徴する商品だった。しかも、彼は働き尽くめで、足で稼ぐ人物だった。

塩酸、硫酸、苛性ソーダなどは、当時、黒目川の水力を使用して、国内最大の伸銅業の拠点だった、電線工場（現・朝霞市膝折）へ、又、ビールの卸業として、近隣の酒屋で小売してもらうための売り込み、などに励んだ。

登録文化財「朝日屋原薬局」として今日まで残された建物のうち、主屋、土蔵、倉庫は、すでに述べたように、原林吉が、先住者の星野家が所有していた土地を買収して建設したもので、その間の事情については、前項で詳しく述べた。

明治四十五年（1912、大正元年）現・朝日屋原薬局の建築は完成して、二丁目にあった借家から移転した。当時、現在の市場通りは、野火止用水を挟む両側に、酒造業の大店が並び、

商いで繁栄するまちだった。「朝日屋」は、二代目となり、林吉の長男、林三が後を継いで、薬剤師として活動を始める。

先代が創始した売薬、例えば、漢方と、輸入されたキニーネを調合した「天龍丸」に加えて、胃腸薬、皮膚病の薬、目薬、その他、百種以上の売薬を製造、販売し、現都内にも、製薬所を設けて販売した。

文化財として登録された数寄屋つくりの「離れ」一棟は、地域の有力者との交友の場所、主に宴会場として使われ、市場地区町内の洋食店、「伊勢周」から当時は珍しかった洋食を、また隣地に所在した、酒造の「清久屋」から樽酒を取り寄せて振舞った。

日本橋本町との繋がり

「朝日屋原薬局」の主屋、二階の窓には鉄筋棒の縦格子が填（は）められている。古民家は、通常木の格子とセットになっているが、家屋内を明るくするモダンな窓枠として、日本橋本町の「小西新兵衛商店」（のちに「武田長兵衛商店」と合併して武田薬品・現武田薬品工業となる）を、モダンな建築を目指した棟梁の小日向が実際に見学して、ほぼ同一の外観をもつ店舗を設計した。原林吉は、小西新兵衛との営業上の取引を越えた友好があった

ようで、大正十三年の関東大震災の折りには、舟運をもって米などを運んで感謝され、以後、世界有数の製薬企業に成長した「武田薬品工業」との直接取引は、昭和から平成時代まで続いた。

五・十三　敷島神社の創建

志木の夏祭りの神輿渡御は、東上沿線随一を誇る。「一之宮」「二之宮」、二つの豪華な神輿をもつ「敷島神社」が本町二丁目に創建されたのは、明治四十一年のことである。それ以前は同地に浅間神社があり、田子山塚の頂上に建立されていた板碑を御神体としていたことが、天保十四年（1843）の「明細帳」に認められている。

明治二十二年の町村制施行で、志木宿は「志木町」となったものの、鎮守社は一貫して舘ノ氷川神社であったから、農耕生活に依存する舘地区と、商いを主体とする町場の引又地区とは自ずと生活様式も異なり、祭りの執行などについても何かと辻褄が合わず、前項でも述べたように、互いに協調することは難しかった。

しかし、明治新政府による神仏分離に起因してか、急増する神社に音をあげた政府は、神社の合併を勧奨する通達を発したのである。これを機として、引又地区では、舘ノ氷川社とは別離し、浅間社を主神、星野稲荷（現・本町二丁目に再建されているが）・村山稲荷（現・本町一丁目、西武と三上邸の境界付近の奥に所在した）と水神社とを合祀して、明治四十一年に新鎮守社を創建した。

但し、新鎮守社の命名では多くの意見が出て、困難が伴った。従来の浅間社名に固執する者、地形からの旭日神社説を主張する者、大和魂や大和撫子の大和民族固有の精神をあげる大和神社説、さらには日本国の別称である敷島神社説など、互いに自説を主張するあまり、決闘も辞さぬほどの険悪な状態であったという。

そこで智者が提案した。それぞれの意見を包含するには、江戸中期の国学の泰斗、本居宣長の詠んだ「敷島の大和心を人問わば、朝日に匂う山桜花」の和歌が良いのではないか。何故なら、敷島・大和・朝日・桜花が含まれていること、しかもこの社の主神は祭神が木花開耶姫であり、桜花にふさわしいし、各説が織り込まれていて、いずれの説に片寄ることもない、との説明に一同は納得し、本居宣長が詠んだ和歌の枕詞から「敷島神社」と命名されたのである。

五・十四　東武東上線の開通

大正三年（1914）五月一日、池袋駅、田面沢駅（現・川越市駅～霞ヶ関駅の中間）間の線路を汽車が走った。当初の駅は、下板橋、成増、膝折（現・朝霞）、志木、鶴瀬、上福岡、川越町（現・

河越市）、田母沢の九駅、一日の列車本数は九本（午前四、午後五）で、所要時間は一時間二十分、志木―池袋間の所要時間は上りと下りとで多少の差異があったが、44分～48分だった。

『志木市郷土誌』に従って、詳細を、以下に記すことにしたい。

東海道線の新橋・横浜間が開通したのは、明治五年のことであるが、鉄道敷設は盛んになる。同十六年、上野―熊谷間に高崎線が開通し、明治十八年には東北本線の一端が敷設されて、埼玉県内に通過する鉄道が開通、明治新政府の興業政策が年を追って民間に浸透し、明治二十八年、西武鉄道会社が川越鉄道を川越―国分寺間に開設したのを始めとして、多数の路線の開設が計画されたが、いずれも実現には至らなかった。

東武鉄道株式会社の東武線が開通した四年後の明治三十六年、東上鉄道の開設が政府に申請された。この路線は、巣鴨―池袋―上板橋―練馬―白子―膝折―大和田―竹間沢―大井―川越を経て、松山から、渋川（現・群馬県）へと、全長七四哩（マイル）に及ぶものだった。最終的には、東武鉄道株式会社・社長根津嘉一郎の手によって敷設されたものである。

明治四十四年、東上鉄道株式会社の創立総会を開催し、東上鉄道の敷設を決める（「東上」とは、東京と上州とを結ぶ意という）。この創立総会には、志木町からも発起人が参加したが、配布された資料の株主申込み者として、井下田慶十郎、西川武十郎、西山鉄五郎、西川利三郎、

中野金次郎、三上権兵衛らの名がある。

特筆すべき井下田慶十郎の活躍

すでに本紙前号で述べたように、明暦二年（1656）の開業以来、引又河岸の回漕問屋を運営していた井下田家では、明治十四年、弱冠十六歳の慶十郎が、隠居した父の後を継いだ。彼は、陸上交通の発達が繁栄を齎すことを自覚し、進んで鉄道敷設の発起人として参画したようだ。

今の東上線の路線を地図上で眺めると、成増の辺りから西方に向けて大きく左に彎曲していることに気付く。前記したように、始めの計画路線は、白子（現・大和町駅）―膝折（現・朝霞駅）から大和田―竹間沢―大井を経て川越に向かうものだった。志木を通過させることを、いわば画策したしたのは、路線を東に移動させることだったのである。

鉄道敷設の認可が下ると、井下田慶十郎は、町内の有志を糾合して東上鉄道が志木町を通過し、志木駅が設置されるよう、関係筋への運動に没頭した。彼は、日夜、東奔西走したばかりか、運動費として巨額の私財を投じたようだ。彼ら町内有志の努力は実を結び、明治四十四年の創立総会で路線の一部が変更され、翌大正元年十一月十一日に改めて許可があった。（また、起点の巣鴨が現在の文京区氷川下町に変更となる）。

変更された計画に従い、池袋から下板橋・成増・膝折・志木・鶴瀬・上福岡・高階（現・新河岸）・川越の各駅を経て、田面沢（現・川越市駅）に至る第一期工事が着手されたのは大正二年十二月一日のことである。

先立って志木町では、駅の設置場所を決め、同二年の十一月二十五日に鍬入れ式が行われた。工事は翌大正三年三月三十一日の予定が約一か月遅れて、同年五月一日に完成して、始めて東上鉄道の汽車が池袋―田面沢間を走った。この日には志木駅においても盛大な開通式が行われ、式の終わったあとで多くの来賓が新河岸川の舟遊びに興じたといわれ、また、当時の『関東新報』には、翌日付で、開通の状況を報じている。その記事には、功労者として町長西山鉄五郎・助役綱島元一郎・西川武十郎・井下田慶十郎・三上権兵衛・三上栄太郎・三上喜三郎の七名が挙げられている。

当時の志木駅の敷地は二千坪（６６００平米）といわれているが、地主の町民有志が寄付したもので、県道と分かれて駅に通じる長さ三五〇間（６５５米）、幅五間（９米）、の「停車場新道」（現・「東町通り」）は、当時の地価で、地主から買収されたが、その買収総額七〇〇〇円は西川武十郎・井下田慶十郎・三上権兵衛・西川利三郎・高野長七・村山惣重・三上徳五郎らの寄付によって充当された。さらに、新道に沿って、有志の寄付によって二百六十八株の吉野桜が植栽され、

後に、「志木のトンネル桜」と呼ばれ、名所となる。駅前には井下田慶十郎が鉄道輸送の貨物を取り扱う丸通運送店を開業、続いて高須五郎が開店した。

開業の当日より一週間は・・・

「汽車半ちん」のチラシ（次の33頁の図）が配布された。その路線図を眺めると、未だ東京駅は無い。後に、現在の東京駅が完成したのは、同年十二月のことである。また、現在の池袋駅を通過する「山手線」が環状運転を開始したのは、大正十四年だった。

東上鉄道は、その後、第二期工事としての田面沢―坂戸間が大正五年に開通、同九年四月、東武鉄道株式会社との合併によって、名称が「東武鉄道東上線」と改まり、大正十二年、坂戸～松山間、および松山～小川間が開通した。最終的に、小川～寄居間が完成したのは大正十四年のことで、池袋～寄居間、全長75キロの東上線が全通した。

昭和に入ってから、支線として越生～坂戸間の鉄道が設けられ、池袋～川越間が電化されたのは昭和四年、池袋～志木間の複線化は昭和二十九年十二月のことである。

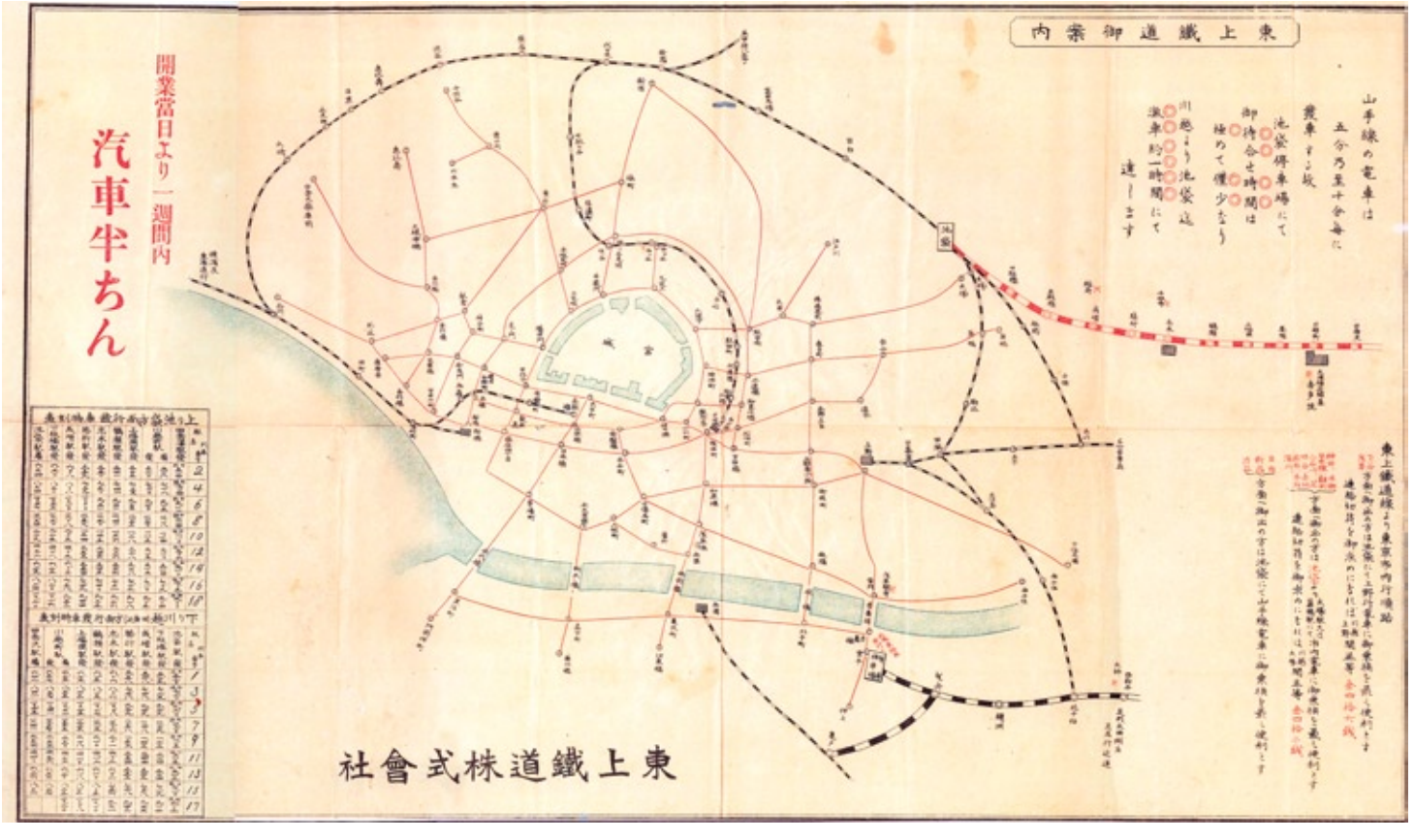
五・十五　志木町に電灯がつく

また、電話が開通したのもこの頃で、かつて、現在の「市場通り」の中央部に所在した「志木郵便局」で通話業務が行われた。大正年間の終りころの「埼玉県番号簿」には、一番～

五十番が記され、例えば、「浦和商業銀行・志木支店」は11番、「国立第八十五銀行・志木支店」は18番、「志木合同タクシー」は33番、「朝日屋原薬局」は37番、「志木町役場」は46番、「志木駅」は47番だが、現在でも、「「志木合同タクシー」は、0033、「朝日屋原薬局」は、0037、「志木駅」は、0047が使われている。末尾二桁は当時のままである。

＝続く　昭和、平成時代へ＝

開業の当日より一週間は・・・
「汽車半ちん」のチラシ



電化された大正時代初期の絵葉書
（全国版で、「志木町市中其二」）

市場坂上から
現・上町方向を望む

伊豆殿堀が流れ、左手前は、料亭の「角万」、続いて西川本家（現／西川医院）、用水の傍に「火の見櫓」が立つ

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL090（3048）5502

編集部　原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行